

NHO フェローシップで参加した九州医療センターでの研修

旭川医療センター 脳神経内科

坂下 建人

2017年5月1日~7月29日まで3ヶ月間、国立病院機構のフェローシップを利用し、九州医療センター脳血管・神経内科に国内留学する機会を得た。同院は福岡市の埋め立てウォーターフロント開発地区内にある。近隣には福岡タワー、福岡市立博物館、福岡ヤフオクドームなどの施設があり、また同院は九州一の繁華街である天神・中洲にもアクセスがよい。福岡都市高速環状線の百道浜出口に近く、市内全域、周辺市町村から数多くの患者が来院する。脳血管・神経内科は脳血管内治療科、脳神経外科と連携し、年間約1000例の脳血管障害、約250例の急性期神経疾患の入院患者を受け入れている。

私は同科のレジデントとして主に救急患者の初期対応と入院加療を担当させていただいた。意識障害、麻痺、感覚障害、めまいなどの症状を訴える救急患者の初期対応を行い、各種検査を実施し、その後入院加療を行う。旭川医療センターと異なる点は、全ての脳血管障害について検査・加療を同院で完結できる点であった。超急性期脳梗塞に対しては禁忌例を除きほぼ全例にrt-PA静注療法を行っていた。主幹動脈の狭窄病変に対しては血管内治療科でカテーテル治療が施行されていた。留学中にrt-PA静注療法やカテーテル治療で劇的に改善する症例を数多く経験することができた。頭蓋内出血の症例で血腫除去術適応例は脳神経外科で手術や周術期管理が行われていた。毎朝行われる3科合同カンファレンスでは頭蓋内出血症例の術式、術後経過などについて確認することができた。rt-PA静注療法、血管内カテーテル治療、外科手術はいずれも旭川医療センターでは行われていない。九州医療センターでの経験を通して超急性期脳卒中患者に対してどのような治療の選択肢があるのかを知ることができ、またその治療を選択した場合のメリット、デメリットを考えることができるようになったことは今回の国内留学での最大の収穫であった。頸部血管エコー検査、下肢静脈エコー検査、経食道心エコー検査などの手技も数多く経験した。旭川医療センターでも同じ検査を患者に行うことができるようになり、日常診療に還元することができている。

九州医療センターは総ベッド数700床を有する総合病院であり、脳卒中患者の合併症や併存症に対しても院内で対応可能であった。また旭川医療センターでは対応できないような他疾患に合併する脳梗塞、例えば血液疾患や膠原病に合併する脳梗塞の症例を多数経験することができた。他科からのコンサルテーションも多く、術後に発生した脳梗塞の診断やその加療なども経験することができた。脳卒中に関連する多くの合併症や併存症に接したことで診療の幅が広がった。

研修中、精査入院を含め39症例を経験した。そのうち脳梗塞は19例、脳出血は3例、脳血管狭窄精査9例、その他8例であった。脳卒中症例の中には最終的に重篤な状況に至る例もあった。その場合、家族への病状説明は大変厳しいものとなるが、スタッフドクタ

一や同科病棟看護師の協力があり、家族に納得していただける十分な病状説明を行うことができた。これは同科で多様な症例を経験したからこそ可能であったと考えている。研修3ヶ月の間に脳卒中に関する幅広い経験をすることができ脳卒中に関する幅広い知識を深めることができた。

九州医療センターでは臨床研究センター長である岡田靖先生、脳血管・神経内科 科長 矢坂正弘先生、医長である桑城貴弘先生に主にご指導いただいた。岡田靖先生からは臨床だけでなく、医療人としての心構えも学んだ。矢坂正弘先生からは脳卒中における神経徴候や治療に関する最新のトピックスをご指導いただいた。桑城貴弘先生からは実際の研修の手ほどきを受けた。また実務の様々な点について配慮していただき、滞りなく研修をすすめることができた。ご指導いただいたスタッフの先生方、また困難な状況でも互いに助け合いながら切磋琢磨したレジデントの先生方、病棟の看護師さんや職員の皆さんのお陰で充実した研修を行うことができた。九州医療センターでの経験を旭川医療センターでの診療に還元し、患者さんとその家族に満足していただけるよう更に努力していきたい。



ウォーターフロント開発地区と能古島



岡田先生、矢坂先生、桑城先生とともに